

オスマン朝期カイロの一参詣書写本 : シュアイビー
の Kitāb yashtamil 'alā Dhikr man dufina bi-
Misrwa-Qāhira min al-Muhaddithīn wa-al-Awliyā'
wa-al-Rijāl wa-al-Nisā をめぐって

大稔, 哲也

<https://doi.org/10.15017/1866709>

出版情報 : 史淵. 136, pp.1-23, 1999-03-10. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

オスマン朝期カイロの一参詣書写本

— シュアイビーの *Kitāb yashtamil 'alā Dhikr man dufina bi-Miṣr wa-al-Qāhira min al-Muḥaddithīn wa-al-Awliyā' wa-al-Rijāl wa-al-Nisā'* をめぐって —

大 稔 哲 也

1. はじめに

カイロの郊外には、現在も「死者の街」と通称される広大な墓地区が展開している。より精確に言えば「死者の街」とは、歴史的に大小カラーファ地区 *al-Qarāfa al-Kubrā*, *al-Qarāfa al-Ṣuḡhrā*, ナスル門外の墓地区と連なりつつあったサフラー地区などから構成される地域を指し、さらに、大小カラーファ地区はムカッタム山と旧都フスタートに東西を、旧カイロとハバシュ湖に南北を画され、サフラー地区は城塞の北東にナスル門外から連なる墓地区をも包摂する形で伸長していた。現行の行政区域名に照らすと、ハリーファ、ミスル・アル・カディーマ、ダッラーサなどに相当する。

筆者はこれまで、西暦 12～15 世紀を中心に、この死者の街が^{おまた}夥多の集団参詣者を迎えて栄え、地区の建造物の荘厳さも頂点を極めてカイロ＝フスタート社会に不可欠な役割を果たしていたことを詳らかにしてきた。¹⁾ その結果、同地区は単に聖墓や一般の墓地区であったばかりでなく、週末や月夜の晩に女性・子供を含めた集団の憩う「エジプトで最も著名な行楽地」と化していたのである。

この分析の際に筆者が主として用いた史料が、「参詣の書 (*kutub al-ziyāra*)」と呼ばれる一群の書であった。これらは、当時みずから参詣グループ (*tā'ifa* その場限りの一種の講) を率いて各墓の事蹟を解説して回っていた

「参詣のシャイフ（御師，shaykh al-ziyāra）」によって書き遺されたものである。²⁾ 参詣書自体はイスラーム世界各地に遍在しており，エジプト死者の街に関してだけでも，25点以上が著されたと思われる。³⁾ しかし，エジプトへのイスラーム到来（西暦7世紀）から15世紀までに限って言えば，そのうち僅か4点のみが現存しているに過ぎない。その内容は，参詣の作法・心得から被葬者の事蹟・逸話までを網羅しており，聖墓のカタログと言ってよい要素も含まれる。また，参詣のシャイフが実際にこれらの書を携行した可能性も認められる。⁴⁾

ところで，15世紀以前のエジプトにおける死者の街，および聖墓参詣の実態に関しては，筆者のものを含めそれなりの研究が現在蓄積されつつある。⁵⁾ しかし，それ以降，特にオスマン朝統治期については研究がほぼ皆無といって良い状態が続いている。その要因は，何よりも関連史料の稀少さ，とくに同時代の参詣書史料の欠落に求められよう。この欠を補い，研究状況を打開するための第一歩として，今回筆者はこれまでほとんど採り上げられることの無かったオスマン朝統治期カイロの参詣書写本を紹介し，その内容検討を行ってみたい。

その参詣書写本とは，シュアイビー Shams al-Dīn Muḥammad b. Shu'ayb b. 'Alī al-Ḥijāzī al-Shu'aybī al-Abshihī 著の *Kitāb yashtamīl 'alā Dhikr man dufina bi-Miṣr wa-al-Qāhira min al-Muḥaddithīn wa-al-Awliyā' wa-al-Rijāl wa-al-Nisā'*（『フスタートとカイロに埋葬されたムハッディス，聖者，善男善女についての記述を含む書』，以下，意味上は不自然であるが略号として，*Yashtamil* とする）である。

この一書の検討をもって，直ちにオスマン朝期カイロの聖墓参詣実態や死者の街の全容解明に結びつくとは思われないが，そのための基礎的データを得るべく，いわば史料の試掘を行ってみたい。これらの結果をもとに他史料を併せ，今後，オスマン朝期の死者の街参詣については別稿にまとめ直したいと思う。筆者自身はこのような研究の積み重ねによって，最終的には，現今のようなエジプト聖墓参詣慣行の退潮へ至る転換期を確定するか，あるいは特定の転換期

を持たぬ緩やかな変化の曲線を想定するべきなのかを吟味し、その上でこれらの要因などを探ってゆきたいと考えている。さらに、現在エジプトにおいては聖者崇敬のエネルギーが聖者生誕祭（マウリド）へと収斂していつているように見受けられるが、その隆盛との関連の有無についても関心を保持している。

2. シュアイビーとその参詣の書

Yashtamil はシュアイビー 1621 年頃の著作であり、その存在についてはかつてユースフ・ラーギブ氏がエジプト参詣書について列挙する中で数行を費やしたに過ぎない。同氏自身はこの写本がカイロのアズハル図書館に存在することをその公刊蔵書目録から知ったとするが、C・ブロッケルマンの著名な『アラビア語書誌史』中の短評以上の関連情報は不明としている。⁶⁾ 管見の限り、これが本写本に直接関連する唯一の紹介であった。

筆者は 1992 年～1993 年にかけて、この写本をアズハル図書館において実見する機会を得て、これが参詣の書の系譜上にあると確信した。また、これまでのところ、これが同書の現存する孤写本とされている。この写本が従来研究対象とされてこなかった理由としては、まずアズハル図書館の厳重な保管状況、そして今回調べてみると、この写本が別タイトルを冠した他写本の革ケース中に紛れて保存されていたこと、さらに、この書が多く書写されることもなく、当時・現代の双方の観点からしても、特筆するほど有用ではなかったこと等が挙げられよう。

(1) 著者について

著者シュアイビーに関しては、前出のブロッケルマン、アズハル図書館の蔵書目録、al-Zirikli、エジプト国立図書館 (Dār al-Kutub al-Miṣriya) 蔵書目録等に僅少データが見られるに過ぎないが、それすらも *Yashtamil* 写本末尾の記述に基づくものである。⁷⁾ それによると、シュアイビーはエジプト・デルタの Maḥalla 出身、カイロ育ちで、シャーフィイー法学派、アフマディーヤ教団（スーフィー教団の 1 つ）に属していた。

本書以外にも数点の著作をものにしていて、ほぼ全て未校訂のままであると思われる。⁹⁾ そのうち筆者はエジプト国立図書館所蔵の2点 *al-Ma'ānī al-Daqīqa* と *al-Jawhar al-Farīd* の4写本を見分することが出来た。両書ともスーフィズム、タリーカ (ṭarīqa, 教団) に深く関わるもので、とくに *al-Ma'ānī* の方はスーフィズムの実践面について詳述している。例えば、シュアイビーはこの中でしばしばズィクル (踊りを伴うアッラーの称名) とハドラ (ḥadra, ズィクルの会合) に言及する。そして、これらの場面でナキーブ (naqīb, 師) はフカラー (fuqarā', ここではスーフィーを指す) がズィクル集会直後に水を飲むのを控えるようにすべきであるなどと諫言している。なぜなら、水は体を衰弱させて視力を弱め、肚の火とズィクルの熱を消すというのである。また、悪魔が血中をめぐるゆえ、若者達を一つ部屋のもとで寝せてはならないとも付け加える。⁹⁾

著述年代についてであるが、奥付によると *Yashtamil* は 1030 A.H. Jumādā Ākhira 月 11 日 / 1621 A.D. に著了され、3年後の 1033 年 Muḥarram 月 15 日にマンスーリー病院図書室 (Maktaba al-Bimāristān al-Manṣūri) の教師 (mu'addib al-aṭfal) 'Alī b. 'Amrū al-Sha'rāwī によって書写されている。一方、*al-Ma'ānī* は 1021/1612 年に著了されたのち、'Alī b. Aḥmad al-Manṣūri によって書写されていた。*al-Jawāhir* の3写本についても調べてみると、各々 1040/1631 年, 1063/1652 年, 1128/1715 年の日付を持つ。この場合、最古の日付 1040/1631 年が著者の筆了時なのか、写本の書写年代なのかは再確認を要する。¹⁰⁾

また、シュアイビーの経歴を知る手懸りの一つに、彼が *Yashtamil* の中で al-Habnasī (al-Bahnasi の誤りか?) をその師 (shaykh-nā) と呼ぶ一節があることが挙げられる。しかし、この人物に関して、これ以上一切の情報は記されていない。¹¹⁾

ところで、筆者は別の側面から、近現代のスーフィー教団関連の史料・研究書について調べてゆく過程で、同時期に活躍した著名なアフマディーヤ系教団の一つに al-Shu'aybiya al-Aḥmadiya があり、しかも、その祖が Shams al-Dīn Muḥammad b. Shu'ayb al-Shu'aybī (1630 年頃没) であるという J.S. Trimi-

ngham のリスト（典拠不明）に行き当たった。F. de Jong は同教団の祖に別人（Ibrāhīm al-Shu'aybī, d.1796 approx.）をあてるが、バクリー（1870～1932年）の *Kitāb al-Ṭuruq al-Ṣūfiya bi-al-Diyār al-Miṣriya* 中の記述の方が正しいと見做し、*Yashtamil* 写本に見えるアフマディーヤ教団との関わりなども含めて判断するならば、これが *Yashtamil* の著者シュアイベーと何らかの関連を持つと筆者は推測している。¹²⁾ 今後さらなる調査を進めたい。

(2) *Yashtamil* の内容と構成

Yashtamil は計 298 葉からなり、全般として著者は名前を挙げた故人の埋葬場所については、必ず言及している。ここで以下に、*Yashtamil* の構成を一瞥してみよう。

まず、序文の後、「カイロとその諸地区に埋葬されたムハッディス (muḥad-dithūn)¹³⁾ とその子孫に関する記述」が始まる。そして、サイイダ・ナフィーサに代表される、Fāṭima b. Sa'd al-Khayr, Āsiya Ukht Yazīd など 17 名の「カイロに居住した慎み深いムハッディサ (muḥaddithāt) 女性の善行の記述」がそれに続く。さらに、「カラーファに埋葬される信仰と善行のムハッディサ女性 (13 名)」に「大小カラーファに埋葬されるハディースを伝えない女性」58 名などが附加される。

次に、「二つのカラーファの諸部族」に関しても 39 以上が記述される。そして、預言者（ムハンマド）の伝記と美質、戦闘やその妻などに関する記述が続くが、その後、ミスルへ埋葬された諸部族に関する記述を含む。また、「第 3 章 (bāb) でその訃報について述べなかった人々に関する記述」も行われ、諸部族の人々のカラーマ (karāmāt 奇蹟・美質)、ウラマーの事蹟がそれを追う。

第 5 章は「カイロとその墓所に埋葬されたムハッディスに関する記述」で、62 名が項目立てられていた。ここで著者は、エジプトの歴代王朝史（ムスリムのエジプト征服からファーティマ朝まで）をも概観する。さらに、「カイロ等の墓地に埋葬されたムハッディスでない者たちに関する記述」にかなりの葉数を費やした後、結章へと導かれる。

以上の紹介のみでは、部分的に章数なども認められ、堅固な構成が想像されるかも知れないが、実際のところ全体の章立ては必ずしも明瞭ではなく、トータルな構成への意欲とバランスへの配慮は弱い。また、著者自ら序数を挙げて人名を列記している場面でも、基本的な数字の誤りが見られる。

(3) 参詣書としての *Yashtamil*

著者シュアイビーは彼以前に執筆された他の参詣書を多く参照・引用しており、また自ら、それらの系譜を踏まえ、延長線上にあると明言していた。この点については、次の一節に明白であろう。

「イブン・アッザイヤートはその書 *Kawākib al-Sayyāra* において、イブン・アン・ナースィフがその *Miṣbāḥ al-Dayāji* で行なったのと異なるように述定した。そして、サハーウィーはその著作の中で、これらの著者と異なる道を採用した。一方、イブン・アル・ジャッバース Ibn al-Jabbās はその著作の中で 10 のタバカ *ṭabaqāt* に分述したが、その第 4 のタバカを完述することなく没した。この書はこれまでのところ最古のもので、これに先立つものはない。*Kitāb Murshid al-Zuwwār* について言えば、こちらは参詣者の欲する有益な教訓と語りを集め、著者自身の考えを説明した。(これらに対して) 私はこの本 (*Yashtamil*) を一つのタバカに括り、完全に役立つようにした。・・・」¹⁴⁾

ここにみられる整理は年代順序に基づいておらず、現在の研究成果によれば、各著者の没年はイブン・ウスマーン (*Murshid al-Zuwwār* の著者。1218 年没)、イブン・アル・ジャッバース (1161-1241 年没?)¹⁵⁾、イブン・アン・ナースィフ (1300 年頃没)、イブン・アッザイヤート (1412 年没)、サハーウィー (1483 年頃没) である。よってここには、むしろシュアイビーと各史料の近接の度合いが示されているのかも知れない。そして、イブン・アル・ジャッバースのものを除いては現存する 4 作品であり、オスマン朝初期にすでに後代へ残る参詣書作品への評価がある程度定まっていたことを推測させる。さらに、近年になってラーギブ氏によって訂正されたイブン・ウスマーンの年代不明ぶり

がすでにこの頃から窺えるように思われる。

また、付言すると、別の箇所ではシュアイビーは *Yashtamil* 著述の理由を、「特定の墓に対する参詣者の知識を正すため」とも述べている。¹⁶⁾

筆者はこれまでの研究の中で、参詣書史料は異なる時代の様々な立場からの言説がその元の語り口を残したまま累積沈澱する^{もつぼ}坩堝であると述べてきた。特に、それ以前の参詣書からの豊富な引用部分に支えられていたのである。¹⁷⁾ *Yashtamil* もその例外ではなく、先行する4参詣書のうち、引用を明言している部分に限っても、*Murshid* を2箇所、*Miṣbāḥ* を14箇所、*Kawākib* を25箇所、*Tuḥfa* を28箇所引用している。これらの引用は主として、写本の第100葉以前に集中しがちであり、例外として *Tuḥfa* はそれ以降に引用される傾向にある。ここでは、*Murshid* の名を挙げての引用がきわめて少ない一方、*Kawākib* からの引用が最も後代の *Tuḥfa* と肩を並べるほど見られることが注目される。ただし、シュアイビーが *Tuḥfa* からの引用と主張している箇所も、実際には *Murshid* からの再引用であったりするので注意を要する。

加えて、その執筆期から当然でもあるが、*Yashtamil* には以前の参詣書にあまり見られなかったマムルーク朝後期のウラマーの名がみえて興味深い。それらは al-Maqrīzī (845/1442年没)、Ibn Ḥajar al-'Asqalānī (852/1449年没) や al-Suyūṭī (911/1505年没) らであり、特にイブン・ハジャル・アル・アスカラーニーは言説の権威の拠り所として頻用されていた。

さらに重要と思われる点は、*Yashtamil* がこれまで紹介されたことのない、恐らくマムルーク朝後期からオスマン朝期にかけての死者の街参詣の書を引用していることである。それらの著者の内には、'Abd al-Zāhir, Ibn al-Munīr や Ibn al-Muballaḥ らがおり、*Yashtamil* によると 'Abd al-Zāhir の書名は *al-Marsūm bi-al-Bāṣira fī-man dufina bi-al-Qāhira min Ahl al-Awrād* であるという。¹⁸⁾ さらに、シュアイビー自身による別の参詣書 *al-Nashr al-Āṭir* もたびたび言及され、彼自身、その書の中で城塞下、ムカッタム山の麓からマタリーヤ al-Maṭariya を北限とする地域に埋葬された主としてヒジュラ歴9~10世紀の2089人以上について記したとしている。¹⁹⁾ それに対して、*Yashtamil* で

は、ハディースの保持者に焦点を絞って記述したとするのである。²⁰⁾ このシュアイビーのもうひとつの参詣書 *al-Nashr al-Āṭir* の名はしばしば *Yashtamil* の中にみえるものの、管見の限り、現在全く知られていない。²¹⁾

現場踏査の報告という観点から見ると、*Yashtamil* にも本人自ら参詣に赴いた形跡が窺える。“墓の位置は南へ14歩行ってから東へ何歩”，あるいは“(故人は895 A.H.年没とされるが)我々はその墓の上に記された没年が900年以降であることを見つけた”といった記述は珍しくないのである。また，“現在こうである，現在墓は崩れて荒れている”といったように，当時の状況を示す記述も豊富に見られる。

ただし，これ以前の参詣書に比較すれば，全般的にシュアイビーは自らの意見を言う箇所が控えめであると言えよう。

(4) 特徴と傾向

第一に，*Yashtamil* は著者自らも言うように，本著作中で要約する形にせよ，ほぼハディースを求め伝える者に限定して参詣対象を集録していた。著者自身によるとその内訳はハーフィズ(コーラン暗唱者)117人，聖者40人，フィクフ(法学)で知られる者17人，その他ハディースを伝える者たちであるという。²²⁾ これはまさしくそれ以前の参詣書になかった斬新な試みであり，その評価は別として，これゆえに本書が書かれ得たとすら言えよう。

第二に，これは第一の点の結果でもあるが，*Yashtamil* はそれ以前の『参詣の書』に比べ，圧倒的に参詣手引き書として非実用的である。すなわち，地区の各墓の配置に呼応して，埋葬された人物の事蹟をそこに連ねてゆくといったスタイルを放棄し，ムハッディスであるか否かなどというより観念的な分類によって組み立ててゆくのである。故人の逸話も，ハディースを中心として知的系譜に偏った，より定型的な記述に終始している。ここに *Yashtamil* の新しさと，同時にトポグラフィ研究にとっての物足りなさが併存していると言えよう。したがって，ナスル門外のクルド墓地やスーフィーヤ墓地などを除いて，参詣のハンドブック，歴史史料としての魅力には乏しいのであるが，この点は

シュアイビーのもうひとつの参詣書 *al-Nashr al-'Ātir* に実現されていた可能性もある。

第三に、シュアイビーは知的系譜を大変重視する。この点はマムルーク朝後期のサハーウィーの参詣書あたりからの趨勢であり、ハディースの伝承経路、フィクフ（法学）や『クルアーン（コーラン）』を誰から学んだのか、あるいはスーフィーの *ijāza*（免状）を与えた師の系図をたどることなどに大層熱心であった。そして、本書の意図上も当然ながら、全般的にシュアイビーはハディースの保持者而非保持者の区分を強調する傾向にあった。おそらく、彼自身もハディースについてそれなりの造詣を誇っていたものと推察される。

他の機会に筆者は、これ以前の四参詣書が、年代記などに記される言わば公式の — それにせよ、かなり民衆の語りを含むことが近年明らかになりつつあるが — 歴史とはズレ、より民衆が受容していたところの「エジプト」史を反映していることを検証してきた。それによればすなわち、参詣書は様々な立場のエジプト人、そしてそこへ外部より眼差しを反映させていた者たちが複層的に構想していた「エジプト」の歴史の全て、エジプト史のパノラマの相貌を見せていたのである。²³⁾

翻って *Yashtamil* についてみると、本書もやはりピラミッド、アイン・シャムスの古代遺跡に頁を割いており、ファラオの妻アースィヤ、モーセ、イエスの逸話や、アラブ・ムスリムのエジプト侵入にあたってのコプトとの取引、ファーティマ朝期の人肉食の記憶など、他の参詣書に描かれてきた「エジプト」史が基本的にはここでもやはり反復されていると言える。²⁴⁾

また、庶民の語りをおある程度反映しているのであろうか、マムルーク朝スルターン・バイバルスが逸話化されて登場するようになるのも *Yashtamil* の特徴である。そこにあってバイバルスは庶民にも身近な歴史上の英雄へと改鑄されている。²⁵⁾ これは、当時人気を博していた語り者文学『バイバルス伝 *Sira Baybars*』中に描かれるバイバルス像と民衆文化の地下水脈の一端で通底していた可能性を持つ。

同様に、アイユーブ朝期サラーフ・アッディーンの下でのカイロ総督であっ

た Qarāqūsh は現在に至るまで、民衆の間で語り物・戯作において典型的な「敵役」の役割を担わせられ続けているが、本書にも地名に関連してなどその名がみえている。そして、敢えて説明の要らぬ衆知の存在であったようにも窺える。²⁶⁾

これ以外に *Yashtamil* の特徴として幾つか付け加えると、著者シュアイビーはアラブ諸部族の情報への執着をみせ、また一般に詩を好んで引用するが、(参詣慣行に関連する)口頭伝承の記載は少ない。そして、スーフイズムの理念的・形而上的な側面を多く記し、逆に実践的な面は同書に稀である。むしろ、この点は同著者の別著作 *al-Ma'ānī al-Daqīqa* の方で補われているものと理解される。

イスラームの教え一般に関して言えば、著者は例えば断食について執拗に描いており、他の宗教色強い側面と相俟って、庶民を教え諭す意図をも担っていたと考えられる。この点は以前の参詣書にも、表現こそ多少異なれ窺えるものである。強いて言えば、これまでの参詣書の方がより逸話や物語の内容によって読者を絡めとってゆく仕組みを有していたが、本書は故人が断食を守っていたかどうかなど直截的な表現を多く持つ。この辺りは、シュアイビーと教団形成との関わりも含めて今後究明されるべきであろう。

加えて、このテキストは統計的データ処理の可能性を秘めている。それは生没年、出生地、カイロへ学びに来た年、埋葬場所、知的系譜などに詳しいためであるが、そこで描かれている典型的な一生とは、イスラーム世界各地に生まれ、学を求めてカイロに来て、後にそこで教鞭を取るようになり、死して死者の街に埋葬される、といったものである。

2. オスマン朝統治初期における死者の街研究へ向けて

(1) 死者の街の地誌

エジプト死者の街の地域確定に関して、*Yashtamil* は「カラーファとはアイン・シャムスからトラー Turā までであるということで、歴史家たちは一致している」と明言する。²⁷⁾ これはシュアイビーの生きたオスマン朝エジプト統治

初期における死者の街の南北限について語ったものと理解できる。その意味では、マムルーク朝期の史料にいうサフラー地区もカラーファに含めて呼称する現況に近い使用法がすでにみえていて興味深い。ただし、これが当時の一般的用法であったのか、シュアイビーの個人的理解であったのかは判断し難い。また、(ムカッタム山の)山麓 (safḥ) 地区に一塊の墓廟群があったことも、シュアイビーの他の記述から確認される。²⁸⁾

他方、死者の街の歴史の変遷に関しては、大カラーファがフスタートの人々の初期 (特にヒジュラ歴 1~3 世紀) の墓地として先行し、その後、小カラーファがムカッタムの山の端 (dhayl) やその周辺の裾野 (safḥ) から小カラーファの mashāhid al-Ṣaḥāba にかけて展開したと述べる。また、イフシード朝期 (935~969 年) にすでにサフフが栄え、ファーティマ朝が al-Za'frān 墓地を建設したことも付け加えられている。²⁹⁾ これらの通時的整理は現在考えてみれば至極当然のものであるが、それ以前の参詣書には見られなかったものである。³⁰⁾

オスマン朝初期の状況については、al-Mujāwirūn 墓地 (turba) とその周辺を再建し、城塞からマタリーヤまでも再建が進んだと貴重な証言を残している。³¹⁾ この両者ともマムルーク朝のサフラー地区に相当するものである。これらの結果として、シュアイビーが Ibn al-Muballaḡ (前出) を引用して曰く、「ライダーニーヤ地区 al-Raydāniya から城塞までに 600 の turba (墓廟・墓地) と 15 の mashhad (聖廟), 19 の jiha (墓地区), が 4000 の墓を包摂してヒジュラ歴 950/1543-4 年までに建設された。その後、近年 (17 世紀初頭) も埋葬は続いている。」³²⁾ こちらも、サフラー地区に該当する地区を指している。

さらに、ナスル門外からサフラー地区にかけてのスーフィーヤ墓地とジュユーシー墓地、サフラー地区のフシカダム墓地と城塞間などがマムルーク朝後期に発展した様子が、*Yashtamil* に報告されている。³³⁾ このように、全般として本書には、マムルーク朝後半からオスマン朝初期にかけての墓地の北東部展開が如実に反映されているように思われる。しかし、より南の大小カラーファ側も旅行記等によればそれなりの繁栄を続けており、上の記述はシュアイビーの *Yashtamil* における関心の所在とも無縁ではないであろう。

また、*Yashtamil* にはオスマン朝期に新設された建造物にも言及がみられる。例えば、960/1552-3 年建立の 'Abd al-Wahhāb al-Sha'rāwī 修道場（ザーウィヤ）や Iskandar Bāshā のジャーミー（会衆モスク）・タキーヤ（修道場）・スィフリージュ（給水場）（963/1555-6 年建立）などである。³⁴⁾

ムカッタム山自身も、依然として高い位置づけにあった。*Yashtamil* は（イスラーム世界中の）祈願（du'a'）が成就される場所として、アラファート山、カアバ神殿、エルサレムとともにムカッタム山の名を挙げることを忘れない。³⁵⁾

墓地の荒廃とそこへの居住に関してもしばしば言及が見られ、特に「現在朽ち果てている、荒廃している」との描写には事欠かない。エジプトにおける墓地居住は近年の社会問題と化しているが、他の機会にも明らかにしたように、これはよく指摘される如く現代に端を発するのみの現象ではない。³⁶⁾ 実際、*Yashtamil* 中にも「ザーウィヤ（修道場）が荒れて現在、墓地へと転用されてしまった」などという例ともに、「墓地が現在、居住地になってしまった」との記述がみえる。これについては、再度後述する。³⁷⁾

(2) 参詣の諸慣行

筆者はすでに様々な機会に、マムルーク朝期以前の「死者の街」参詣慣行について、歴史的民族誌の蓄積と考察を行ってきた。³⁸⁾ そこでの議論は多岐にわたるが、その際のデータ中にあらわれた主要な慣行を指標にして、*Yashtamil* の検討を試みたい。そして、結論から先に言うと、聖墓参詣慣行一般は同著の中からも十分に窺い知れる。それは「この墓は現在まで参詣される」、あるいは「この聖廟は参詣者で大変混雑している」、「人々が殺到している」といった記述からも明らかであろう。³⁹⁾ また、Muṣṭafā 'Alī, Kabrīt, al-Nābulṣī, al-Khiyārī, E.Çelebī ら当時のエジプト旅行者の記録も総合して判断すると、エジプトの参詣スタイルを特徴づける集団参詣も依然として存在していたと推測されるが、この点に関する *Yashtamil* の記述は希薄である。⁴⁰⁾

以下、参詣の諸慣行について個別に見てゆくと、まず、墓への接吻や体のこすりつけ、腰掛けを禁ずる記述がハディースの引用という形で見られる。⁴¹⁾ ま

た、サイイダ・ナフィーサ廟への参詣者は定型化されたドゥアー（祈願）を唱えることが要請されていたものと思われる。⁴²⁾

次に、墓へのナズル (*nadhr* 願掛け・供物) も盛んであった。具体的には、香、サフラン、ロウソク立て、油、ランプなどを供物して願掛けを行っていた例を、再引用によってだが見出せる。⁴³⁾ それとも関連して、墓で光が見えるという報告がやはり繰り返されおり、これは墓に献灯する慣行の結果と考えられよう。この慣行は、光のともった被葬者の美質・奇蹟の文脈で解釈することも可能と思われる。⁴⁴⁾

一方、祈願成就 (*ijāba al-du'ā'*) という概念の重要性、祈願成就をめぐる慣行とそれに対する参詣者の心性は、このオスマン朝統治初期にあっても依然、持続していた。筆者が以前、12~15世紀の死者の街参詣の書を分析した際には、参詣者にとって最も関心が深い事項がこの「祈願成就」であり、少なくとも書かれたレヴェルにおいて、生前もしくは墓中の聖者はアッラーに参詣者の案事を「執り成す」だけであり、それを最終的に叶えるのはアッラーのみであるという心性構造が見られたのである。それゆえ、各参詣書は祈願成就する場所について克明に記録していた。⁴⁵⁾

Yashtamil においても、のべ25ヶ所以上の場所が祈願を叶えると明示されている。特に、Sayyida Āmina の聖廟 (*mashhad*) と *Asmā bint 'Abd al-'Azīz* 聖廟との間に立ち、*Kawm al-Manām* (丘) を背に (ムカッタム) 山に面して案件を祈願すると成就する、と言う箇所は、自らの意見として注記している。⁴⁶⁾ しかし、これは以前の参詣書に比べかなり少数となっており、ここにも *Yashtamil* の非実用性があらわれている。そして、生前から人々の祈願を叶えていた聖者に至っては、名前こそ挙げているものの、ほぼマムルーク朝以前の例である。加えて、シュアイビーはハディースを引く形で、祈願のとくに叶いやすい時季、叶う祈願の種類を挙げていた。⁴⁷⁾

祈願成就のメカニズム中であって、聖者・被葬者によるアッラーへの「執り成し *shafā'a*」概念もこの時代、依然として重要な役割を果たしていた。⁴⁸⁾ その中で、『クルアーン』のヤー・スィーン (第36) 章を詠んだ者に対する同章自体

によるアッラーへの執り成しについても、やはり引用がなされている。⁴⁹⁾ さらに、クルアーンを詠んだり、日々の善行に対するアッラーからの報奨 (thawāb), およびそれを他者に贈る例もやはり見出せる。⁵⁰⁾

墓地への居住が、決して近年のみの現象でないことは先に触れておいたが、シュアイビーによるとそれはすでに2/8～9世紀から始まっていたという。⁵¹⁾ ナブルスィーの旅行記によれば、オスマン朝統治初期に、カラーファのイマーム・ライス 廟付近にはハーラ ḥāra (街区) と家並みが拵がっていたとも報告される。⁵²⁾ これ以外にも、同時期に墓地が居住空間へと転用された例を挙げることが出来る。⁵³⁾ さらに、カイロ周辺 (カラーファやナスル門外墓地) を舞台に、この時代も移葬が行われていたことは注記に値しよう。⁵⁴⁾

以上、*Yashtamil* にあらわれた参詣慣行を概括してきたが、それ以前の参詣書に比べ残念ながら、本書は参詣慣行に関してはあまり多くの情報を網羅していなかった。むしろ、オスマン朝期に関しては旅行記の情報の方がはるかにヴィヴィッドな参詣慣行の記述を残していたと言える。Muṣṭafā 'Alī (1599年参詣), Kabrīt (1039/1629-30年参詣), al-Khiyārī (1083/1672-3年没), E. Çelebî (1080/1670年頃参詣), al-Nābulṣī (1114/1702年参詣) らは、実際に死者の街の集団参詣に参加し、その模様を活写していた。なかでも、ナブルスィーは聖廟内の状況を克明に綴っており、例えば、毎週金曜礼拝後にイブン・アル・ファーリド廟では、故人の詩をもとに歌と踊りのハドラが繰り上げられていた。参加者は気に入った箇所ですら「もう一度！」と声をかけることができ、すると他の参加者もそのフレーズを繰り返すといった、うねるような熱気と異様な陶酔が描写されている。⁵⁵⁾

(3) カラーマ Karāmāt ((奇蹟・美質)

ほとんどの被葬者に関して、*Yashtamil* ではそのカラーマへの言及が見られる。しかし、テキストの後半部にゆくに従って、その(故人の)カラーマは多いとだけ記し、カラーマの内容を略す傾向が見られる。それでもなお、本書においてもカラーマの重要性は指摘できよう。ただし、それ以前の参詣書に比し

て、カラーマにも具体的設定・庶民生活のプロットが少なく、より抽象化の傾向が窺える。

Yashtamil に描かれるカラーマの内容についてみると、病いの平癒、地面収縮、水上歩行と空中浮遊、変質の術、創出譚、渴水譚、透視、異類譚、不在の探知、改宗譚、改悛譚、食物譚、金銭譚、護身、死後の奇蹟、夢における預言者ムハンマドや天国の美女Hür al-'Ayn と交流などが挙げられる。さらに、学識、芳香、粗衣、世間からの隔絶、イスラーム的善行なども語られている。これらすべては、筆者がこれまで四参詣書を分析する過程で抽出してきた諸範疇に含まれこそすれ、それから逸脱する例は見られなかった。⁵⁰⁾

3. 結びに代えて — その後の参詣史料の展開見通しを含めて —

Yashtamil はハディース保持の有無を指標にして参詣対象を再構築するという新たな試みであり、その成否は別として、評価するとすればまずこの点であろう。同時に、死者の街の地誌、参詣の慣行、そしてオスマン朝期の口頭伝承という点においては大いに物足りなく、以前の参詣書に比べ格段に劣ると言える。

そのような中であっても、シュアイビーの参詣書および他史料からは、著者の時代における参詣慣行の潮流の大きな変化は依然、窺えなかった。同様に、参詣の慣行と旅行記等に見られるマウリド（聖者生誕祭）の隆盛は、*Yashtamil* において全く連関してこないのである。これについてはマウリドの側からも、精緻な再検討を要しよう。

すなわち、オスマン朝統治初期の死者の街、およびその聖墓参詣慣行に関して探究するためには、*Yashtamil* だけでは不十分であると結論せざるを得ない。とくに、建造物、宗教施設などの考察には地誌や年代記が有効であろうし、参詣慣行については旅行記の記述が役立つ。さらに、支配者層と死者の街との関係については年代記の精査が不可欠となろう。そのなかでも、写本の形で多く残存するアラビア語年代記群、E.Çelebi の旅行記に代表されるオスマン語史料は最たるものである。これらの分析結果を手懸りに、イスラーム法廷 *sharī'a*

文書、および各種法学書、スーフィー関連書を併せ援用することによって、今後より総合的な検討が可能と考えている。また、オスマン朝という語が *Yasht-amil* の全文中わずか 2 ヶ所しか登場しないことの意味をも含め、同朝の存在をエジプト社会史の枠組みの中でいかに位置づけるのかも問われてこよう。

最後に、以上のこととも関連して、シュアイビー以降の参詣史料の見通しについて付言しておきたい。現時点の筆者の仮説では、その後、幾つかのジャンルへと機能分化しつつ展開してゆくように思われるのである。参詣書自体の展開としては、前出バリ INALCO (Bibliothèque interuniversitaire des langues orientales) 所蔵写本 *Untitled Index of Saints' Tombs in Cairo* (著者不詳) や、ハサン・カースィム (今世紀初頭のエジプト人学者) が最後の参詣書とする al-Sukkarī (18 世紀) のものが挙げられるが、前者がわずか 16 葉、後者が 49 葉とそれ以前のものに比べ極端に短くなっている。⁵⁷⁾ 内容的にも、墓のリスト的記述に徹しており、参詣慣行やカラーマの記述、民族誌や聖者伝的要素を失ってゆく。その意味では、マクリーズィーの影響の濃厚な Ibn Abī al-Surūr al-Bakrī (1060/1650 年没) の地誌作品や著名な 'Alī Mubārak (1893 年没) の『新地誌』中のカラーファの記述に近づいてゆくと見えよう。⁵⁸⁾

他方、アフル・アル・バイト (Ahl al-Bayt, 預言者ムハンマドの一族、その範囲には幾つもの解釈がある) とその子孫の美德、およびその墓への参詣については、独立した書が編まれるようになってくる。それらは、al-Ujhūrī (1784 年没)、al-Qal'āwī (1815 年没)、al-Shablanjī (1883 年没)、al-Jumzūrī, al-Mushkī, Aḥmad b. Muqaybal へと連なる系譜である。これらの内でもさらに、力点を預言者一族の美德に置いたものと、墓参の方に置くものとのニュアンス差が認められる。⁵⁹⁾ そして、これらの著作は普通、他の著名聖墓にも言及していた。また、これらは他の『聖者列伝』、『聖者のカラーマ (美質・奇蹟) 集』ともジャンル上近接しており、部分的には情報の交換を行っていた。この端的な例はナブハーニー al-Nabhānī が聖者のカラーマを中心に集録した *Jāmi' Karāmāt al-Awliyā'* である。

さらにこれらの著作活動と表裏一体のこととして、ヒジュラ歴 1000 年代前

後に *Murshid* や *Miṣbah* など、以前の参詣書が頻繁に書写されている点も見逃せない。しかも、*Murshid* などのように、著者没後に何者か（あるいは書写者自身）が墓数を増やして記述を加えた形跡が明白な例もある。このことは、以前の参詣著作が依然として参詣の手引書として有効であったり、むしろより良きものとして使用されていた可能性を示唆しよう。実際のところ、少なくともマムルーク朝以前の墓に関しては、位置と形状、故人のエピソード、参詣慣行など、いずれの知識量をとっても以前の参詣書の方が圧倒的に凌駕しており、著名聖墓は十分に網羅できたはずである。

主要引用史料

- 'Alī Mubārak : al-Khiṭaṭ al-Tawfiqīya al-Jadīda li-Miṣr al-Qāhira wa-Mudun-ha wa-Bilād-ha al-Qadīma wa-al-Shahīra*, 20vols., Būlāq, 1305 A.H..
- al-'Ayyāshī : al-Rihla al-'Ayyāshīya*, 2vols., al-Ribāṭ, 1977.
- al-Durar al-Munif* : Aḥmad b. Ahmad Muqaybal al-Miṣrī, *al-Durar al-Munif fī Ziyāra Āl al-Bayt al-Sharīf*, MS. Dār al-Kutub al-Miṣrīya, Taṣawwuf 2323.
- Evlīya Çelebī : Seyahat-name*, Istanbul, 1938.
- al-Ḥaḡīqa : al-Nābulī, al-Ḥaḡīqa wa-al-Majāz fī al-Rihla ilā Bilād al-Shām wa-Miṣr wa-al-Hijāz*, al-Qāhira, 1986.
- al-Jawhar* : al-Shu'aybī, *Kitāb al-Jawhar al-Farīd wa-al-'Iqd al-Mufīd (Waḥīd) fī Tarjama Ahl al-Tawḥīd*, Dār al-Kutub Taṣawwuf 237,250, Majāmi' 229.
- al-Jumzūrī : Tuḥfa al-Zā'irīn wa-Bughya al-Ṭālibīn fī Mashhad al-Imām Zayn al-'Ābidīn wa-Madh' Āl Bayt al-Mukarram*, MS. Dār al-Kutub al-Miṣrīya, Ta'rīkh Taymūrīya 472,1706.
- Kabrīt : Rihla al-Shitā' wa-al-Sayf*, ed. al-Ṭanṭāwī, M.S., Bayrūt, 1385A.H..
- Karāmāt* : al-Nabhānī, *Jāmi' Karāmāt al-Awliyā'*, 2vols., al-Qāhira, 1984.
- Kawākīb* : Ibn al-Zayyāt, *Kawākīb al-Sayyāra fī Tartīb al-Ziyāra fī al-Qarāfatayn al-Kubrā wa-al-Ṣuḡhrā*, al-Qāhira, 1325 A.H..
- Kawākīb Ibn Abī al-Surūr* : Ibī al-Surūr, *al-Kawākīb al-Sā'ira fī Akhbār Miṣr wa-al-Qāhira*, MS. Bibliothèque Nationale, arabe 1852.
- al-Khiyārī : Tuḥfa al-Udabā' wa-Salwa al-Ghurabā'*, 3vols., Baghdād, 1980.
- al-Ma'ānī : al-Shu'aybī, Kitāb al-Ma'ānī al-Daḡīqa al-Wafīya fī-ma yalzam Nuqabā' al-Sāda al-Ṣūfiya*, Dār al-Kutub Taṣawwuf Taymūr 160.
- Miṣbāḥ* : *Ibn al-Nāsikh, Miṣbāḥ al-Dayājī wa-Gawth al-Rājī wa-Kahf al-Lāji*, MS. Dār

al-Kutub, Buldān Taymūr 87.

Murshid : Ibn 'Uthmān, *Murshid al-Zuwwār ilā Qubūr al-Abrār*, MS. Dār al-Kutub, Ta'rikh 5139,

al-Mushkī, Mizā Muḥammad : *al-'Adl al-Shahīd fī Taḥqīq al-Mashāhid*, al-Qāhira, 1327 A. H.

Muṣṭafā 'Alī : *Muṣṭafā 'Alī's Description of Cairo of 1599*, tr. Tietze, A., Wien, 1975.

Nashaq : Ibn Iyās, *Kitāb Nashaq al-Azhār fī 'Ajā'ib al-Aqtār*, MS. British Library Or.7503.

al-Qal'āwī : *Mashāhid al-Ṣafā fī al-Madfūnīn bi-Miṣr min Āl Bayt al-Muṣṭafā*, Ms. Dār al-Kutub al-Miṣriya Ta'rikh 2136.

Qatf : Ibn Abī al-Surūr, *Qatf al-Azhār min al-Khiṭāṭ wa-al-Āthār*, MS. Dār al-Kutub al-Miṣriya, Jughrafiyā 457.

al-Shablanjī : *Nūr al-Abṣār fī Manāqib Āl Bayt al-Nabī al-Mukhtār*, al-Qāhira, 1948.

al-Sukkarī, 'Alī b. Jawhar ; *al-Kawkab al-Sayyār ilā Qubūr al-Abrār*, al-Qāhira, 1992.

Tuḥfa : al-Sakhāwī, *Tuḥfa al-Aḥbāb wa-Bughya al-Tullāb fī al-Khiṭāṭ wa-al-Mazārāt wa-al-Tarājīm wa-al-Biqā' al-Mubārakāt*, ed. M. Rabī' & Ḥ. Qāsīm, al-Qāhira, 1937.

al-Ujhūrī : *Mashāriq al-Anwar fī-man dufina bi-Miṣr min Āl al-Bayt al-Athār*, MS. Dār al-Kutub al-Miṣriya Ta'rikh 3279.

Yashtamīl : al-Shu'aybī, *Kitāb yashtamīl 'alā Dhikr man dufina bi-Miṣr wa-al-Qāhira min al-Muḥaddīthīn wa-al-Awliyā' wa-al-Rijāl wa-al-Nisā'*, MS. Maktaba al-Azhar, Ta'rikh 5105819.

註

本稿は *Mediterranean World* vol.15,1998, 所収の抽稿 “A Note on the Disregarded Ottoman Cairene Ziyāra Book” を補訂したものである。また、その一部はすでに京都大学東洋史研究会大会 (1996.11.3) において「オスマン朝期カイロの「死者の街」研究序説」と題して口頭発表している。当日貴重なコメントを下された方々にここで厚く御礼申し上げる。

- 1) 抽稿「エジプト死者の街における聖墓参詣 ——12~15世紀の参詣慣行と参詣者の意識——」(『史学雑誌』第102編・第10号, 1993年), 1-49頁, “The Manners, Customs, and Mentality of Pilgrims to the Egyptian City of the Dead : 1100-1500 A.D., (ORIENT vol. 29, 1993年), 19-44頁, 「12~15世紀・エジプトにおける死者の街——その消長と機能の諸相——」(『東洋学報』第75巻・第3・4号, 1994年), 161-202頁, 「エジプト死者の街と聖墓参詣 ——12~15世紀の事例をもとに——」(東京大学提出博士論文, 1994年12月)。なお、これらの執筆にあたって筆者は Ch. Taylor の Ph.D dissertation, *The Cult of the Saints in Late Medieval Egypt* (Princeton University, 1989) を活用できなかったが、同論文は筆者と同じくエジプトの参詣書を扱った研究であり、

分析の方法と視角は筆者と異なるものの、幾つかの歴史事実に関しては先行する記述がなされていた。

- 2) 一例を挙げると、845/1442年のある時点で、同時に11のグループが各々カラファへ集団参詣に出かけていたと報告されている。*Tuḥfa* 159.
- 3) Y.Rāḡib, "Essai d'inventaire chronologique des guides à l'usage des pèlerins du Caire", *REI*, vol.16, 1973, pp.259-280 に筆者の調査結果を加えた。
- 4) *Miṣbāḥ* f.5. cf.) C.Taylor, *The Cult of the Saints in Late Medieval Egypt*, Introduction, 拙稿「史料としてのエジプト参詣の書—12~15世紀の死者の街をめぐるテキストとその可能性」(『オリエント』第38巻・第2号, 1996年), 143~161頁。
- 5) 主要なものに関しては、前掲拙稿「エジプト死者の街における聖墓参詣——12~15世紀の参詣慣行と参詣者の意識——」39-40頁註(2)(3)を参照のこと。他に重要なものとして、A.F. Mehren, *Cāhirah og Kerāfat, historiske Studier under et Ophold i Ægypten 1867-68*, Kjøbenhavn, 1869 など。
- 6) Y.Rāḡib, "Essai d'inventaire chronologique des guides à l'usage des pèlerins du Caire", pp.259-280, *Fihris al-Kutub al-Mawjūda bi-al-Maktaba al-Azharīya*, vol.5, p.529, C.Brockelmann, *Geschichte der Arabischen Litteratur*, Leiden, 1942, vol.2, p.449, *Supplement*, vol.2, 470.
- 7) al-Ziriklī, *al-A'lām*, Bayrūt, 1992, vol.6, p.159, *Fihris al-Kutub al-'Arabīya al-Mawjūda bi-Dār li-Ghāya Sana 1921*, 2vols., al-Qāhira, 1924, *Fihris al-Taṣawwuf wa-al-Aḥlāq al-Dīnīya*, al-Qāhira.
- 8) これらの書名を記すと、1.) *Kitāb al-Ma'ānī al-Daḡīqa al-Waḡīya ft-ma yalzam Nuqābā' al-Sāda al-Ṣūfiya*, (Dār al-Kutub Taṣawwuf Taymūr 160), 2.) *Kitāb al-Jawhar al-Farīd wa-al-'Iqd al-Muḡīd (Waḡīd) fi Tarjama Ahl al-Tawḡīd*, (Dār al-Kutub Taṣawwuf 237, 250, Majāmi' 229), 3.) *Maḡāsin al-Akḡbār ft Faḡl al-Ṣalāt 'alā al-Nabī al-Mukḡtār wa-Maḡāsin al-Sāda al-Akḡyār*, 4.) *Tuḥfa ulī'l-Falāḡ bi-Sharḡ Ḥizb al-Faḡ wa-al-Najāḡ*, 別名 *Faḡ al-'Ālam wa-al-Ghayb bi-Sharḡ Wird b. Shu'ayb*, さらにもう一つの別名 *al-Fawā'id al-Baḡīya bi-Sharḡ Wird al-Sāda al-Shu'aybiya*.
- 9) *al-Ma'ānī* fols.152, 122.
- 10) *al-Jawhar Majāmi' 229* (1040A.H.), *al-Jawhar Taṣawwuf 237* (1063A.H.), *al-Jawhar Taṣawwuf 250* (1128A.H.).
- 11) *Yashtamil* fol. 208a.
- 12) J.S.Trimingham, *The Sufi Orders in Islam*, Oxford, 1971, p.274, F.de Jong, *Turuq and Turuq-linked Institutions in Nineteenth Century Egypt*, Leiden, 1978, p.15, note 42. cf.) *ibid.*, pp.36, 68, 69, 182, 213, Muḡammad Tawfiq al-Bakrī, *Kitāb al-Turuq al-Ṣūfiya bi-al-Diyār al-Miṣriya*, (ed. Abū al-Wafā al-Taftāzānī, *Majalla Kullīya al-Ādāb, Jāmi'a al-Qāhira*, vol.25, 1963), p.78, Fārūq Aḡmad Muṣṭafā, *al-Binā' al-Ijtimā'ī li-al-Ṭarīqa*

al-Shādhiliyya fī Miṣr, al-Qāhira, 1980, p.324, Maḥmūd Abū al-Fayḍ al-Ḥusaynī, *Jawhara al-Awliyā' wa-al-A'lām Ahl al-Taṣawwuf*, al-Qāhira, 2 vols., 1968, vol.2, p.276, al-Jabartī, *'Ajā'ib al-Āthār fī al-Tarājim wa-al-Akhhbār*, Būlāq, 1880, vol.4, p.190. (高松洋一氏より史料借用。記して感謝します。) なお, al-Taftāzānī は al-Shu'aybiyya al-Aḥmadiyya をアフマディー教団中の 5 al-Bayt al-Ṣaghīr (小バイト) の一つに数えている。cf. Abū al-Wafā al-Taftāzānī, "al-Ṭuruq al-Ṣūfiyya fī Miṣr", *Majalla Kullīya al-Ādāb, Jāmi'a al-Qāhira*, vol.25, 1963, p.73. 筆者は前稿 "A Note on the Disregarded Ottoman Cairene Ziyāra Book" でこの教団情報を見過ごし、これ以上のデータは見つかっていないと記してしまった。

- 13) 本書中, ムハッディスとは, 預言者ムハンマドにまつわるハディース (聖伝承) を明白な系譜によって伝えている者のことを示す用法が一般的である。
- 14) *Yashtamil* fols. 72b-73a.
- 15) 参詣書の著者に 2 人存在した通称 "イブン・ジャッバース" のうち, 最初の Abū al-Ḥasan 'Alī b. Aḥmad b. Muḥammad b. al-'Ālī Jawshānk と考えるとこの年代 (1161-1241) になる。しかし, もう一人の Sharaf al-Dīn Abū 'Abd Allāh Muḥammad b. 'Alī b. al-Jabbās と考えるならば, 1235 年生まれとなり, シュアイビーの言う「最古の」と言うのは誤りとなる。内容からするとむしろ後者の可能性が強いため, 依然再考の余地を残す。cf. Y.Rāgib, "Essai d'inventaire chronologique des guides à l'usage des pèlerins du Caire" pp.270-275.
- 16) *Yashtamil* f. 67a.
- 17) 前掲拙稿「史料としてのエジプト参詣の書」, 144~150 頁など。
- 18) *Yashtamil* f.2b.
- 19) *ibid.*, fols.256 b-257a. その内訳は, 「ウラマーとハーフィズであるハディースの徒 119 人, 有力者 (akābir) 100 人, ハディースを求める者 500 人, ウィラヤーで知られる者 100 人, それ以外 500 人のファキーフ (法学者) と教師, 100 人のライースとそれに従うフィクフの徒 500 人以上, クッラーのイマーム 70 人, キラーア (コーラン誦詠) で知られる 100 人」となっている。
- 20) *ibid.*, f.237 a.
- 21) 筆者は前稿 "A Note on the Disregarded Ottoman Cairene Ziyāra Book" p.79 において, この *al-Nashr al-Āṭir* がバリの旧 Bibliothèque de l'Institut des langues et civilisations orientales (現 Bibliothèque interuniversitaire des langues orientales) 所蔵写本 *Untitled Index of Saints' Tombs in Cairo* (著者不詳) (Arabic Manuscript no.404) と何らかの関連を持つ可能性があるが, その閲覧は筆者が連絡を取り始めた 1994 年以降不可能になっている, と述べた。そして, その閲覧再会が強く望まれるとも付け加え, 各所に前掲稿抜き刷りを配布しておいた。今年 (1998 年) の 9 月になって事態は好転し, 当該の写本閲覧が可能となった。そこで, *al-Nashr al-Āṭir* と INALCO 所蔵写本の関連に

ついて私見を述べると、両者は直接関係ないとの見通しを得た。この件に関して大層尽力していただいたコレージュ・ド・フランスの Yūsuf Rāghib 氏、INALCO の Nathalie Rodoriguez アフリカ・中東部門主任、および Mounem Rāshida 同図書館員、さらに写本のコピーを送ってくれた Drew 大学の畏友 Christopher Taylor に深く感謝したい。

- 22) *Yashtamil* f.258a.
- 23) 拙稿「史料としてのエジプト参詣の書」、同「死者の街と「エジプト」意識 ——ムスリム社会の聖墓参詣——」(『地域の世界史 7 ——信仰の世界史——』, 松本宣郎・山田勝芳編, 山川出版社, 1998 年), 52~93 頁, Tetsuya Ohtoshi, *Muslims and Copts as Reflected in the Ziyāra Books and Qarāfas*, A Paper presented at International Area Studies Conference, *Islam in the Middle Eastern Studies : Muslims and Minorities*, Monbusho International Symposium, 1998.
- 24) *Yashtamil* fols. 146b, 218a, 139a~140b, *al-Ḥaḡiqa* f.188 他。
- 25) *Yashtamil.*, fols. 134a-b, 223b, 224a-b, 133a.
- 26) *ibid.*, fols. 140b, 79a, 224a. cf. Fārūq Sa'd, *Qarāqūsh wa-Nawādīr-hu*, Bayrūt, 1990, Ibrāhīm Sha'lān, *al-Nawādīr al-Sha'bīya al-Miṣrīya*, al-Qāhira, 1993. 現代のエジプト演劇におけるカラークーシュの悪役設定の影響については、長沢栄治「近代エジプト村長職をめぐる権力関係」(伊能武次編『中東の国家と権力構造』所収, アジア経済研究所, 1994 年, 199 頁) を参照。
- 27) *Yashtamil* fols. 146b-147a.
- 28) *ibid.*, fols., 146b-147a, 83a, 228a, 83b, 53a.
- 29) *ibid.*, f.153b.
- 30) *ibid.*, fols., 146b-147a, 153a, 296a-b.
- 31) *ibid.*, fols., 296a-b.
- 32) *ibid.*, f. 234a.
- 33) *ibid.*, fols., 233b-244a.
- 34) *ibid.*, f. 143a. cf. Aḥmad Shalabī, *Awḡaḡ al-Ishārāt fī man tawallā Miṣr al-Qāhira*, al-Qāhira, 1978, p.112.
- 35) *Yashtamil.*, fols., 93a-b.
- 36) 前掲拙稿「12~15 世紀・エジプトにおける死者の街 ——その消長と機能の諸相——」, 170~171 頁を参照。
- 37) *Yashtamil*, fols. 229a-b, 139b etc..
- 38) 註(1), (2)などを参照。
- 39) *Yashtamil* fols. 222a, 163a-b, 5a, 9a, 197b 他。
- 40) *Muṣṭafā 'Alī, al-Ḥaḡiqa*, *al-Khiyārī* and *Evlīya Çelebt* を参照のこと。
- 41) *Yashtamil* f.162a.

59) *al-Ujhūri*, *al-Qal'āwi*, *al-Shablanjī*, *al-Jumzūri*, *al-Mushkī*, *al-Durar al-Munif fī Ziyāra Āl al-Bayt al-Sharīf* を参照。